

ミュージアム・コンサート

「アルフォンシーナと海」～時を越える美しい愛の歌～

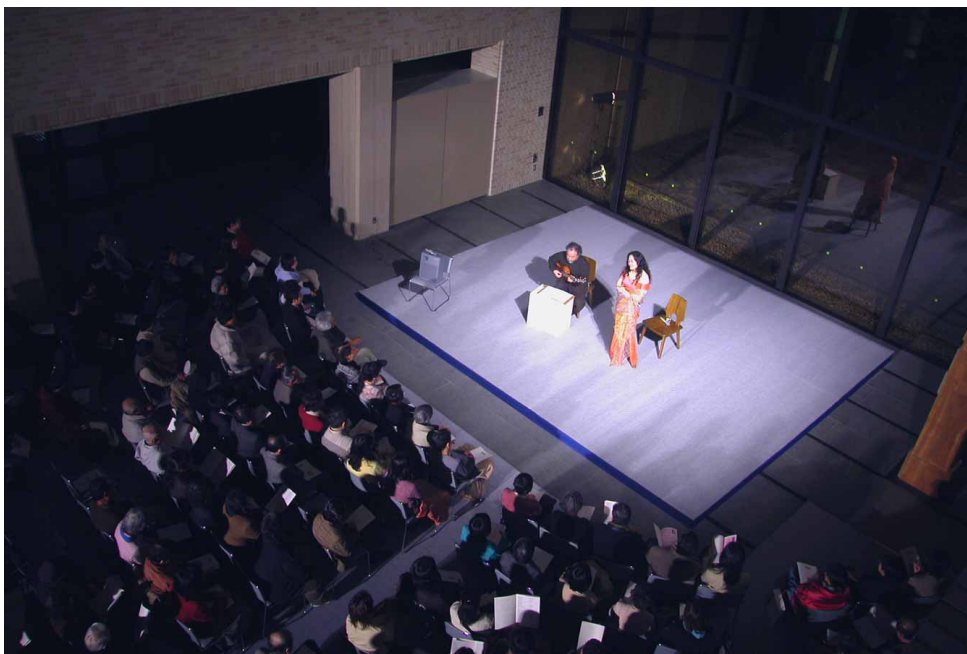
演奏 波多野睦美（メゾ・ソプラノ）

つのだたかし（19世紀ギター）

2005年2月20日の日曜日午後6時、エントランスホールは音楽会前の静かな興奮に包まれた。やがて波多野睦美さんと、つのだたかしさんが登場。つのださんはシューベルトがウィーンで生きていたころの古格あるギターを手に、レンブラントの絵から抜け出てきたような風貌で椅子に座り、波多野さんの澄んで静かな歌声からコンサートは始まった。9年ぶりに聞く声である。実はこの二人、1996年11月9日に開かれた「スペイン古曲のあたらしい響き」と題した音楽会で「タブラトゥーラ」として演奏してもらったことがあった。「タブラトゥーラ」は、つのださんが主催する幾つかの演奏団体のうちのひとつで、いわゆるクラシック以前の「古楽」と呼ばれている

音楽を演奏するときのグループ名である。

つのださんはその時はギターではなくて、リュートをつかった。リュートは正倉院御物の琵琶とも親戚の楽器である。東にむかったものが「琵琶」となり、西にむかったものが「リュート」になった。ギターとは全然系統のちがう楽器で、音楽会中につのださん曰く、ギターは爪をつかうが、リュートはつかわないとのこと。しっとり余韻をのこすセレナーデ風の音楽でも、波多野さんのもつ声には古いギターの響きのほうがふさわしかったのか。ともあれ、ギターと女声のデュオという、これまでにない組合せのせいか、さらにまた曲目のせいか、これまで以上に心に沁みる音楽会になったようだ。(Hs)



ミュージアムコンサート風景